鷗外の軌跡

――「高瀬舟」「寒山拾得」と「上院占席」問題――

篠原義彦
（教育学部国文学研究室）

「高瀬舟」は大正五年一月一日発行の「中央公論」第三十一年第一号に発表された森鷗外の歴史小説であり、大正七年二月十五日に春陽堂から発行された単行本「高瀬舟」に「ぢいさんばあさん」「最後の一句」「山椒大夫」「寒山拾得」「魚玄機」「二人の友」「天寵」「余興」「曾我兄弟」「女がた」の諸作品とともに収載された。「高瀬舟」は「寒山拾得」とともに鷗外の歴史小説の最後を飾る作品であり、「高瀬舟」が「中央公論」に、また、「寒山拾得」が「新小説」第二十一年第一巻に発表されてから十二日後の大正五年一月十三日には、鷗外の最初の史伝「渋江抽斎」の東京日日、大阪毎日両紙への連載が始まっている。

鷗外の日録によれば、「高瀬舟」を「草し畢」ったのが大正四年の十二月五日のこと、翌六日の条には、「高瀬舟を滝田哲太郎に付与す。石黒男忠悳に復す。上院占席の事に関するなり。角田勤一郎来話す。」[1]とある。続いて「寒山拾得」の脱稿が十二月七日で、八日の条には「寒山拾得を春陽堂に遣る。」の記事があり、また、十日の条には「田中純に寒山拾得を交付す。」とある。

一方、鷗外は「高瀬舟」脱稿後四日、また、「寒山拾得」脱稿二日後の十二月九日「近業解題」なる一文を「心の花」を主宰する佐佐木信綱のもとに送っている。「近業解題」は、「高瀬舟と寒山拾得――近業解題――」と題し、二作品収載誌が発行されたのと同じ、大正五年一月一日付の「心の花」第二十巻第一号に発表されたが、単行本収載の際、「附高瀬舟縁起」「附寒山拾得縁起」と改められた。

「高瀬舟」と「寒山拾得」は、その間わずかに一日を置いて書かれた作品である。二つの作品はその内包する問題においても極めて密接な関連性を有する作品である。「高瀬舟」を滝田哲太郎に「付与」した日、すなわち、「高瀬舟」脱稿の翌日であり、「寒山拾得」脱稿の前日に当る十二月六日、鷗外は、石黒忠悳に「必親展」と認めた一通の書簡を発している。

御懇書只今拝読仕候小生身上御知悉ノ上ニテ御心ニ懸ケサセラレ上院占席ノ7向々ヘ御内話被下候趣難有奉存候縦令成就候トモ邦家ノ為メ何ノ御用ニモ相立マシク慚入候ヘトモ御下命ノ上ハ直ニ御受可申上ハ勿論一層言行ヲ慎ミ御推薦ノ厚宜ニ負候事無之ヤウ可仕候又成就セストモ御盛宜永ク記念可仕候[2]

陸軍省から出されたこの書簡の文面によれば「上院占席」についての石黒書簡を「只今拝読」した鷗外が直ちに認めた返書ということになる。返書の内容は以下のことである。

（1）「上院占席」についての石黒忠悳の「内話」進捗の報に対して感謝したい。

（2）「上院占席」御下命とあらば「直ニ」お受けしたい。
（3）一層言行を慎しみ、石黒の厚誼に背くことのないようにしたい。
（4）たとえ不首尾に終っても石黒の厚意は永く心にとどめておきたい。

いわゆる貴族院勅選議員推薦問題である。十一月二十二日の日録には「次官大嶋健一に引退の事を言ふ。石黒男忠悳来話す。」とあり、翌二十三日には、賀古鶴所に対して大嶋次官に辞意を表明した旨を告げている。また、二十四日の条には「鶴田禎次郎に告ぐる所あり。」の一文が見られる。鶴田禎次郎は、大正五年四月十三日鷗外の後を襲い、陸軍省医務局長となった人物である。十二月六日陸軍省医務局長室に届けられた石黒書簡は、十一月二十二日の鷗外の動静と無縁なものではない。

石黒の「上院占席」に関する書簡を鷗外が受け取ったのが十二月六日、返書を認めたのも同じ六日である。「高瀬舟」の脱稿が五日、「寒山拾得」のそれが七日であり、一方、「近業解題」の書かれたのは八日か九日のことであろう。とすると、自明のことではあるが「高瀬舟」執筆時には、「上院占席」に関する石黒書簡は勿論鷗外の知らざるところであり、「寒山拾得」と「近業解題」は石黒書簡読了後の作物ということになる。

鷗外に宛てた石黒書簡については、今はその詳細な内容を知る由もない。しかし、鷗外の辞意を知った石黒が「上院占席」について秘かに「内話」を進めていることが記されていたことは、鷗外の返書からも確実に推定される。

鷗外と石黒との関係は、微妙でかつ深い。竹盛天雄氏の紹介した「不円文庫蔵石黒忠悳日記」明治二十一年七月五日の条に見られる「車中森ト其情人ノ事ヲ語リ為ニ愴然タリ後互ニ語ナクシテ仮眠ニ入ル」[3]以来の微妙な関係は、鷗外と赤松則長海軍中将の長女登志子との結婚、日本医学会創立をめぐる乙酉会との対立、登志子との破鏡という複雑な様相を呈しつつも、断ち切られることなく続いてきた。鷗外の医事官僚としての生涯は常住坐臥石黒の縛に喘がねばならなかった。その意味において、鷗外の帰朝直後の九月十五日付の「陸軍軍医学会雑誌」の報ずる「帰朝、石黒軍医監医学士森一等軍医ハ本月八日帰朝セラレタルヲ以テ本会々員ハ去十二日偕行社ニ会同シ祝筵ヲ開設セリ」[4]という日、すなわち、九月十二日の石黒演説と鷗外森林太郎の緘黙の宣言は以後の両者の関係を象徴して余りあるものである。

「此ニ忠悳カ例ノ軍医社会ヲ思フノ熱心ヨリ一言シタキハ是迄他ノ例ヲ見ルニ洋行者ガ帰ルト学術ハ勿論其風ニ至ルマテ少壮輩ハ之ヲ学フヲ常トス森氏ノ風ニ於ケル余ハ諸君カ之ヲ学フヲ欲セズ何トナレバ余ノ見ル所ニヨレバ独乙士官ノ風ニハアラズ寧ロ独乙ノ風流家ノ風多シトモ言フ可キカ」という石黒の断案と

今日海外覩る所の事物に就て演説すべきなれども、未だ敢てせざる者は抑も故あり。凡そ欧洲の紀律殊に厳整なる軍隊にては、少年の将校等の陸軍内に関する言論は常に其趣旨を一上官に聞し、其裁可を得て、方纔公衆に向ひ之を演説するを得るなり。是を以て風紀紊れず。僕心窃に之を羨む。僕敢て本邦軍隊にても一般に此の如きを希望すと言はず。然れども自己一身に限りては他日或は言はんと欲することあるも、必ず之を一上官に質して後之を言はんと欲す。是れ僕が今日囚卒の際敢て濫に口舌を弄するを欲せざる所以なり。[5]

という苦渋の字面との背後に横たわる鷗外の傷は深い。日本医学会創立をめぐる医事論争をあたかも中に挟むかのようにして展開される登志子との結婚と破鏡に至る経緯の中にも、鷗外の妥協と反噬の絵柄が見え隠

れしている。

鷗外は明治四十年十一月十三日陸軍軍医総監に任ぜられ、同時に陸軍省医務局長に補せられた。松本順（林のあと再任）、林紀、橋本綱常、石黒忠悳、石坂惟寛、小池正直に続く第八代陸軍軍医総監である。就任直前の十月二十六日の日録には、「夕小池正直の宅に往く。医務局長の職務を引継がんと云へばなり。」とあり、二十八日の条には寺内正毅陸軍大臣に上申のうえ、引継ぎに当っての「局員組織」に関する小池正直の要求を拒絶したことが知られる。また、三十日の条には、「石黒男を訪ひて、小池の要求を拒みしことを告ぐ。」の文言が見られ、局長交替という時期にあって、石黒忠悳に対する鷗外の意味深長なる配慮がうかがわれるところである。

鷗外は大正七年十二月十七日山田珠樹にあてた書簡の中で、「かのやうに」以下のいわゆる五条秀麿ものについての解説を行っているが、その中で、大正二年七月一日「中央公論」に発表された「鎚一下」に触れて、「鎚一下第一ノエピソードハ梨本宮様ヲ送リ奉リシ時ノアリノマヽニ候其ニハ Cynique（アシキ意味ニアラズ）ナル石黒男爵ガ出シアリ候本文ハ全ク写生ニテ疎ニ流レ自ラ無価値ト思ヒ居候……（後略）……」[6]と記している。「アシキ意味ニアラズ」という注釈付きの「Cynique ナル石黒男爵」が登場するのは以下の場面である。

又或る日矢張目上の人を送りに往った時、こんな事があった。其人は顕要の地位に居る人である。それで平生心易く交際してゐても、今日のやうなはれ〴〵しい日になると、己は努めて近所に寄らずにゐる。己はけふも隅の方に立ってゐた。すると隣に或る皮肉家がゐて、己に呟いた。「どうだい。皆物欲しげな顔ばかりだなあ。」己はこれを聞いて只無意味に微笑した丈であったが、実は心中に強い刺戟を受けた。此詞は魔の杖の如くに、己の周囲の紳士淑女を獣の姿にしたのである。なる程さう云はれてから見ると、どの男もどの女も、今日立って行く人に何物をか求めてゐるらしく見える。それから己は自分を顧みて見た。実際今日立って行く人には、まさか己を生かしたり殺したりすることは出来ぬが、少くも己を浮ばせたり己を沈ませたりすることは出来る。そして其人に睨まれたくないと云ふ情は、慥に己の心のどこかに潜んでゐる。して見れば、己も獣の群の中の獣である。己はむねが悪くなった。このむねの悪い己の心持は、停車場を出た後まで残ってゐた。[7]（傍線筆者）

秀麿は新橋停車場で「高貴な方」を見送った際に、「高貴な方の随員たる其男」に「今日は一般の謁見はありません」と言って肩を衝かれた。その秀麿が思い出すのが当該部分である。

「或る皮肉家」の一言は、秀麿の周囲に立ち並ぶ紳士淑女を一瞬のうちに獣の姿に変えた。「或る皮肉家」の前では紳士淑女も裸同然である。しかも、鷗外に密着すれば、この皮肉家は、かつて「今日立って行く人」でもあり、「少くも己を浮ばせたり己を沈ませたりする」ことのできた人でもあったはずである。引用部分に先行する新橋停車場の場面で、「高貴な方の随員」の仕草に対して、秀麿は「城鼠社狐」[8]なる套語と「決闘」という概念を想起している。秀麿が高貴な方の随員に対して刹那のうちに抱いた感情を掘り進めて行けば、当然「或る皮肉家」の一句に衝き当る。

鷗外森林太郎が「上院占席」に関する石黒書簡を陸軍者医務局長室で受け取った時、男爵石黒忠悳は既に「予備役被仰付」の身である。しかしながら、斯道の先達である石黒軍医総監との関係は鷗外の疎略になしえないものである。「皮肉家」が単に「皮肉家」にとどまらず、「今日立って行く人」に先祖返りする可能性は依然として鷗外に残されていた。明治十四年十二月陸軍軍医副任官以来の恩顧と拮抗の図式の中で「其人

に睨まれたくないと云ふ情」は鷗外の心の深層に居すわり続けていたはずである。ましてや、大原慧氏の紹介する「昨夜より降雪、本日は終日霏々地上積ること三寸許ニて、随て寒さ強く大寒之入と被レ覚候。尊堂益御健栄奉レ賀候。謹て寒中御見舞申上候。一、無政府党判決も相済候ニ付此後世評如何と静観仕候。近時之種々の著述ニ寔ニ寒心ニ不レ堪もの多く、それも地位名望ある輩の名の下ニ刊行候ものニまゝ有レ之、必竟彼等之如き輩等生し候は、一は立言・著書の結果とも被レ存候。古人異端を撃破するに勉め候事、今更思当り申候。」[9]という山県有朋あての石黒書簡（明治四十四年一月二十一日付）を見据える時、「城鼠社狐」の中に生きてきた鷗外は、直ちに返書を認める必要性を感じたのではなかろうか。近代日本のターニングポイントでもあった明治四十三年秋の政治的状況に対する極めてディオニュソス的な「侃諤の議論」[10]の展開以降、鷗外にはアポロ的仮面を被る必要性もあったはずである。

鷗外の返書における「御下命ノ上ハ直ニ御受可申上ハ勿論一層言行ヲ慎ミ御推薦ノ厚宜に負候事無之ヤウ可仕候」とは不可思議な言辞である。言わずもがなの感さえする文言であると同時に、その根底であの「偕行社にて衛生部将校に告ぐるの一節」における緘黙の宣言につながるものを感じさせる。「上院占席」についての石黒書簡には、鷗外の「言行」についての批判ないしは警告の言辞が存在していたはずである。その言辞を受けての「一層言行ヲ慎ミ」云々であろう。大逆事件判決後三日にしての山県有朋あて石黒書簡における「近時之種々の著述ニ寔ニ寒心ニ不レ堪もの多く、それも地位名望ある輩の名の下ニ刊行候ものニまゝ有レ之」というメーン・テーマは再び奏でられていたはずである。

鷗外は陸軍省医務局長室で一縷の望みと大方の諦観を持って返書を記したのではなかったか。鷗外の退官の日付の決定時期が判明しない以上、不確実性は免れないものの、大正五年四月十三日付の「陸軍軍医総監医学博士文学博士森林太郎　依願予備役被仰付」[11]なる辞令の発効四か月前の「内話」にも疑問は残る。陸軍軍医部の人事権を所掌していた鷗外は人事の要諦について知悉していたはずである。明治四十二年一月十八日から三月二日にかけての日録に散見する日本赤十字病院長後任問題に見られる鷗外の鮮やかな対応に留意すべきであろう。

原もと子氏は「祖父忠恵のこと」において次のように記している。

ここでひとこと触れたいのは、森鷗外氏と況翁のあいだについてである。たしかにある時期にいたって石黒忠恵は森林太郎氏にとって、かつて幸田露伴先生がおもしろく指摘されたように（「蝸牛庵訪問記」）、やっかいな「目の上の瘤」であったにちがいない。陸軍留学生として華やかな四年余りのヨーロッパ滞在によって、自由の空気を存分に吸いこみ、広い世界に眼を見開いた若い天才にとって、本国からなにかと指図を言ってよこし、ついにドイツにまで出かけてきた「この気の合わぬ上役」は、実に不愉快きわまりない存在であったであろう。しかし、そもそもの始め森氏の偉才を認め、求めに応じて軍医部に採用したのは況翁だったのであるから、森氏が陸軍内に留まられるかぎり、彼の行動に関しても上司としての責任ある態度をもって対処せざるを得なかったことも事実にちがいない。[12]（傍線筆者）

石黒忠恵の近親者として、包括的な叙述ながらも二人の関係について極めて示唆に富む表現である。

石黒と鷗外をめぐる問題については、坂本秀次氏の秀れた分析があり、[13]坂本氏は、「石黒忠恵と鷗外」において、大正二年六月の「二つの象徴的な描写」、すなわち、陸軍軍医団編纂発行の「陸軍衛生制度史」における鷗外の石黒評と「鎚一下」を取りあげて、「同時期に綴った二つの描写は、読み合わせると、森の本音を聞くような思いがする。こうして、石黒と森との隠微な対立は、終生かわることがなかった。」と総括して

いる。坂本氏の明敏な結論に賛意を表するものであるが、「鎚一下」についての山田珠樹あて書簡に見られる「石黒男爵ガ出シアリ候」について、坂本氏は「自分の『肩尖に手を掛けて押し戻』した『一人の男』とは、かつての上官でありいまは陸軍を退役した男爵石黒忠悳である。森は差別に一瞬激しく憤怒を覚えたが、直ちに冷静になり、自己を押えて、上司を批判する象徴的な小説に化した。」と記しておられる。「石黒男爵ガ出シアリ」について、「肩尖に手を掛けて押し戻」した一人の男とする考え方は、既に吉野俊彦氏にも見られるところであるが、いかがなものであろうか。「肩尖に手を掛けて押し戻」した男は、秀麿に「今日は一般の謁見はありません。」と語った「知らぬ」男であり、「高貴な方の随員たる其男」であることは文中に明白に記されている。とすると、「石黒男爵」は、「牛込の男爵」であると同時に、高貴な方の「随員たる其男」であるという奇妙な図式が成立してしまうことになる。(14)

鷗外は山田珠樹にあてて、「其には Cynique（アシキ意味ニアラズ）ナル石黒男爵ガ出シアリ候」と記している。鷗外は、「石黒男爵」という語の上に、わざわざ「Cynique ナル」の修飾語を冠している。「Cynique ナル石黒男爵」に呼応するのは、既に引用した秀麿の思い出の中の、「或る皮肉家」でなければならない。「Cynique ナル」人物と「皮肉家」とは、相呼応することばである。すなわち、顕要の地位にある人を見送りに行った五条秀麿に、「どうだい。皆物欲しげな顔ばかりだなあ。」とささやいた「或る皮肉家」のモデルが石黒男爵である。

「城鼠社狐」の跋扈する官僚社会にあって既に三十四年の歳月を閲した鷗外である。大正四年の歳晩にあって、鷗外は一縷の望みは持ちつつも、大方は自虐的な情感にひたりつつ、あえて「物欲しげな顔」をしつつ、「獣の群の中の獣」になったのではないか。その結果として、「むねが悪くなった」鷗外は一気に「寒山拾得」を書き上げたのではなかろうか。「附寒山拾得縁起」に見られる「いつもと違て、一冊の参考書を

も見ずに書いたのである。」という背景説明の一節は、単に「子供にした話」のためだけのものではない。

大正二年三月一日発行の雑誌「太陽」第十九巻第三号の「医界評論」（日東学人）は森林太郎を取りあげている。鷗外は二月五日臨時宮内省御用掛となっており、日録五日の条には、「宮内省に往き、渡辺宮相千秋の手より辞令を受く。臨時宮内省御用掛被仰附となり。車寄へ御礼に参る。宮相の高縄第、次官河村金五郎の青山の宅に名刺を通ず。侍医局に往きて西郷吉義と打ち合す。夜北里柴三郎、小橋一太を常磐屋に饗す。賀古鶴所も亦来会す。福井智賢再び来訪す。」とある。「太陽」三月号の「医界評論」は、鷗外の臨時宮内省御用掛拝命の一件を取りあげたもので、六ページにわたる長文である。

過般新聞紙上、森林太郎氏の「宮内省御用掛被仰付」との辞令を見たる某博士、学人に奇問を発して曰く、「恁は文学博士たる森林太郎氏を指したるか。将又医学博士たる森林太郎氏を指したるか」と　味ひ来れば、諷嘲善罵、真に骨を刺すものあり、蓋し医学博士たる森林太郎氏の学殖は、博士として殊更に賞め立る程の価値なきも、鷗外漁史たる森氏は海外文芸の紹介者として世夙に盛名を伝へ、現に文学博士として斯界の重鎮たれば也。

で始まる「医界評論　森林太郎」は、鷗外の医務局長就任以来の事績に触れて、「博士が衛生学者として如何なる地位に在るやは、吾人に取って甚だしき疑問たり。最も能く博士を知れりと為す者にも亦多少の疑問あるを免れざるもの丶如し。」としたうえで、以下のように記している。

夫れ文学美術の嗜好は、本業の余暇、疲れたる脳中に一種の滋養液を注射して、脳力に全く異なりたる刺戟を与へ、脳の営養（うつ）を補ふに於

て最も有効なるをや。然れども本業以外の趣味が副業の形となつて現はるゝ場合には、凡そその本業の何たるを問はず、本業以外に得る所大なる程、本業に於て失ふ所大なるを疑ふべからず。独り森博士は此通理に反して、本業以外に得る所極めて大なるに拘らず、本業に於ても失ふ所なく、得る所却て益々大なるは異数と謂ふべし。併しながら此異数に居る森博士は果してかかる異数の立場に居るを以て自家の栄誉となすや否、吾人頗ぶる疑ひなきに非らず、何となれば博士の本業は言ふまでもなく医学者たるの立場に存せり。然るに医学者としての面目を発揮せる所甚だ貧弱なるに反し、却て文士として医界に重きを為すが如くなるは、その本業を辱かしむる甚だ大なるを免れざれば也。博士が文士を本業として医学者を副業とせず、医学を専業として文学を副業とせしは、本来主客を顚倒せるの嫌なきに非らず。是畢竟博士が天禀の多能多才一処に跼蹐する能はざるの致す所ならんも、博士の医界に於ける声名遥かに文壇の盛名に及ばず、その成績亦之れに準ずるの事実に顧み医界一方の重鎮たる医務局長の椅子に博士を見るは、如何にしても奇異の感なき能はざる也。況んや新たに宮内省侍医局御用掛たるをや。（傍線筆者）

鼎の軽重を問うの感さえする論難であり、かつて鷗外が福岡日日新聞に[15]掲載した「鷗外漁史とは誰ぞ」で記した「予が医学を以て相交はる人は、他は小説家だから与に医学を談ずるには足らないと云ひ、予が官職を以て相対する人は、他は小説家だから重事を托するには足らないと云つて、暗々裡に我進歩を礙げ、我成功を挫いたことは幾何といふことを知らない。」という絵柄が再び展開されている。このような批判・論難は、官職にある鷗外にとっていわば宿命とでも呼ぶべきものであり、臨時宮内省御用掛の拝命という新たな事態がアキレスの腱に衆目を向わせることになったものである。

この「太陽」の鷗外批判に対して、鷗外はかつて見せたようなジャーナリスティックな反応は示していない。あの明治四十三年の夏から秋にかけて見せたような迅速にして勇猛果敢なる反論は見られない。例えば、「あそび」（明治四十三年八月一日「三田文学」）は、「太陽」七月号における三宅雪嶺や樋口竜峡の批判に対する回答であり、続く「ファスチェス」は「太陽」八月号の今村恭太郎東京控訴院判事の「官憲と文芸」への反論であったし、十一月号の「三田文学」の「沈黙の塔」は、九月十六日から十月四日にかけて東京朝日新聞に連載された「危険なる洋書」[16]に対する鷗外の批判でもあったが、大正二年三月の鷗外は過去のそれとはちがって寡黙である。

「医界評論」は、医事における功績が「貧弱」である鷗外が陸軍省医務局長の椅子にあることを奇異とし、その上新たに臨時宮内省御用掛を拝命したことを批判したものであり、文事における活躍があたかも医事における責務を軽んずる要因であるかのような筆致である。鷗外の「盛名」に対する痛烈なる攻撃であり、二足の草鞋を穿く鷗外の痛点に迫まる指摘である。あの「キタ・セクスアリ」に対する「帝国文学」（明治四十三年八月一日）の「最近文芸概観」における「これを読んで道学先生が憤死しようと、三輪田元道氏が目を廻はさうと、警視庁小説検閲係が作者の威光に怖れて『スバル』の発売禁止を断行し得なからうと、そんな事はどうでも宜い。が、作者自身の経験をああいふ風に上滑に陳列しただけでは、主人公の自白通り畢竟近世式高等枕草紙以上の価値は無い。無論局処局処を切り放して見れば讃嘆に価する描写が沢山あるが、小説としての全体の価値が劣等ならば、部分の美は強ひて独立の存在を主張する権利はあるまい。鷗外氏とも言はれる人が若い作家に立まじつて、こんな下らぬものを書くのは以来大いに慎んだらよからう。」や「危険なる洋書」第六回の「我日本陸軍軍医総監医学博士兼文学博士『スバル』派文士の頭領森鷗外先生は日本に於けるエデキントの最初の

紹介者であるが此の鷗外先生は昨年『スバル』に青年の性慾発達史めいたものを書いて発売禁止を受けさせられた。而して博士の夫人は頻りと婦人生殖器に関する新作を公にされる。」という論難の延長線上に位置するものであり、いわば鷗外批判の常套手段でもある。しかし、鷗外はかつてのような反撃に出ようとはしない。自らの堡塁に立てこもったままである。

大逆事件結着後の「カズイスチカ」（明治四十四年二月一日「三田文学」）「妄想」（三月一日、四月一日「三田文学」）における自己検証的思念の展開や「かのやうに」（明治四十五年一月一日「中央公論」）における閉塞状況とその直後に展開される歴史小説の世界での鮮明なる蘇生の軌跡の背景にあるものをたどる時、そこに退官後の座標という現世的「フイリステル」（「普請中」）の世界が望まれていたとしても特段の不思議ではない。明治と大正という二つの時代の「日本の官吏」の奥津城として当然の論理でもあったはずである。大逆事件後の鷗外の慎重さも「興津弥五右衛門の遺書」（大正元年十月一日「中央公論」）を最初とする歴史小説の世界への沈潜という問題も、その底辺のどこかに「フイリステル」としての食指が動いていたはずである。鷗外は文殊でもなければ、普賢でもない。給仕が「叩かずに戸を開けて」出て来る日本の「フイリステル」として生涯を過してきたのが鷗外森林太郎である。渡辺参事官にとっては、ドイツの歌姫との「晩飯丈」が破格であったが、鷗外自身も通常の状況において「フイリステル」の奥津城を迎えるべきものであって、「破格」を回避すべく自己検証の曲が奏でられたとしても不思議はない。

大正三年八月二十日、鷗外は陸軍省から鈴木三重吉あてに一通の書簡を発している。

お手紙は一昨夜頃拝見しました。併し役人仲間で「早出遅引」と云ふ境界に身を置いてゐるので、御返事が出来ませんでした。それにどうしようかと考へてもゐました。兎に角あれのためにスバルが大学総長の机に上り、宮内次官の机にも上つたわけですから、遠慮しなくてはならぬ処があります。又禁書に入れられぬにも限りません。もつと進んで云ふと、世間がモデルだとしてゐる人も、わたくしも宮内省に籍を置いてゐますから、どちらか一人、又は二人共、問題再燃のために引かなくてはならぬといふ始末に立ち到らぬにも限りません。仮にそこを踏み切つて出すとしても、お手紙にある「誘引的」な点がこちらに取つては尤妙ならぬ点であります。「意見」とかはいつでも書きます。只どんな事を書いたものかちよつと見当が附きません。夏目さんはどんな物を書きましたか。甚だ煮え切らぬ御返事で相済みませんが、あまり久しくなりますから、これだけの事をお聴に入れておきます。「我等」をまだ一字も書いてゐません。さしあたりこれに困つてゐます。(17)

明治四十二年六月一日の「昴」に発表された「魔睡」をめぐっての返書である。臨時宮内省御用掛としての配慮であり、文字どおり「煮え切らぬ」返事である。「魔睡」や「キタ・セクスアリス」、そして、「あそび」や「フアスチエス」、「沈黙の塔」で見せた鷗外像とはちがったもう一つの鷗外像が見られる。

大正四年十二月五日に「草し畢」った歴史小説「高瀬舟」の世界は、明治四十二・三年のディオニュソス的世界での自己検証の帰結として生まれた「カズイスチカ」や「妄想」の絵柄と軌を一にするものである。「カズイスチカ」には「落架風」「一枚板」「生理的腫瘍」という三症例が描かれているが、最も重要な Casuistica は、花房医学士自身に係るものである。「翁は病人を見てゐる間は、全幅の精神を以て病人を見てゐる。そして其病人が軽からうが重からうが、鼻風だらうが、同じ態度でこれに対してゐる。盆栽を翫んでゐる時もその通りである。茶を啜つ

てゐる時もその通りである。」という老翁の処世の態度に対比される花房医学士の「生」は以下のごとくである。

花房医学士は何かしたい事若くはする筈の事があつて、それをせずに姑く病人を見てゐるといふ心持である。それだから、同じ病人を見ても、平凡な病人だと詰まらなく思ふ。Intéressant の病症でなくては厭き足らなく思ふ。又偶々所謂興味ある病症を見ても、それを研究して書いて置いて、業績として公にしようとも思はなかつた。勿論発見も発明も出来るならしようとは思ふが、それを生活の目的だとは思はない。始終何か更にしたい事、ずる筈の事があるやうに思つてゐる。併しそのしたい事、する筈の事はなんだか分らない。或時は何物かが幻影の如くに浮んでも、捕捉することの出来ないうちに消えてしまふ。女の形をしてゐる時もある。種々の栄華の夢になつてゐる時もある。それかと思ふと、其頃碧巌を見たり無門関を見たりしてゐたので、禅定めいた contemplatif な観念になつてゐる時もある。兎に角取留めのないものであつた。それが病人を見る時ばかりではない。何をしてゐても同じ事で、これをしてしまつて、片付けて置いて、それからといふやうな考をしてゐる。それからどうするのだか分からない。(18)

花房医学士の病巣がみごとに抉り出されている。この花房の病巣は「カズイスチカ」に続いて発表された「妄想」において、より鮮明な映像を結ぶことになる。

「生れてから今日まで、自分は何をしてゐるか。始終何物かに策うたれ駆られてゐるやうに学問といふことに齷齪してゐる。これは自分に或る働きが出来るやうに、自分を為上げるのだと思つてゐる。其目的は幾分か達せられるかも知れない。併し自分のしてゐる事は、役者が舞台へ出て或る役を勤めてゐるに過ぎないやうに感ぜられる。その勤めてゐる役の背後に、別に何物かが存在しなくてはならないやうに感ぜられる。策うたれ駆られてばかりゐる為めに、何物かが醒覚する暇がないやうに感ぜられる。(19)」という chambre garnie での想いは、「妄想」の翁の過ぎ去りし「二十代」の自省の言のみにとどまるものではない。「カズイスチカ」における花房の病巣の映像は、「妄想」における翁の述懐を重ねることによって、より精細な画像となって読者の前に映し出されてくる。鷗外の被らせた過去というカムフラージュの下には、五十歳の生身の人間の憤怒と苦渋と悔恨の息づかいがある。

「高瀬舟」の世界は、そういう鷗外の自己検証の結実として存在している。京都町奉行所同心羽田庄兵衛にとって、遠島の罪人喜助の知足の心は驚異の対象である。喜助の足るを知る「生」を知った瞬間、同心羽田庄兵衛は、「喜助さん」なる語を発している。懐中にするわずか二百文の鳥目に安住の境を見出し、遠島の舟にわが身を委ねる喜助にとっては、「人殺しと云ふものだらうか」と思って一瞬「お上」の処断に疑念をさしはさんだ羽田庄兵衛の知恵の働きはない。状況のままに生き、状況のままに罪人とされ、状況のままに遠島の身となる喜助は、同心羽田庄兵衛にとって驚異の存在である。「今さらのやうに驚異の目を睜って」見た羽田庄兵衛が罪人喜助の頭から毫光がさすように思ったのも無理はない。

彼我の「懸隔」に気づいた羽田庄兵衛の思いが次のように記されている。

一体此懸隔はどうして生じて来るだらう。只上辺だけを見て、それは喜助には身に係累がないのに、こっちにはあるからだと云ってしまへばそれまでである。しかしそれは謚である。よしや自分が一人者であつたとしても、どうも喜助のやうな心持にはなられさうにない。この根柢はもつと深い処にあるやうだと、庄兵衛は思つた。

庄兵衛は只漠然と、人の一生といふやうな事を思つて見た。人は身

に病があると、此病がなかつたらと思ふ。其日其日の食がないと、食つて行かれたらと思ふ。万一の時に備へる蓄がないと、少しでも蓄があつたらと思ふ。蓄があつても、又其蓄がもつと多かつたらと思ふ。此の如くに先から先へと考て見れば、人はどこまで往つて踏み止まることが出来るものやら分からない。それを今目の前で踏み止まつて見せてくれるのが此喜助だと、庄兵衛は気が附いた。[20]（傍線筆者）

「縁起」において、「翁草」で「流人の話」を読んだ鷗外は、「二つの大きい問題」が含まれていると思ったと記している。「財産と云ふものの観念」と「ユウタナジイ」の問題である。

この「二つの大きい問題」に関して、長谷川泉氏は、「森鷗外論考」において、『高瀬舟』はいかにも二つの問題が別個の興味によってつなぎ合わされただけで、統一的テーマによる一貫性の乏しい作品である。それは鷗外の作家としての構成力の不足に帰する。作品の楽屋を語った『縁起』が無ければまだよい。しかし『縁起』は、あまりにも他意なく二つのテーマへの作者の興味の分裂を露呈しているのである。」と指摘しておられる。確かに「縁起」はその点で語りすぎの感さえするところがあるが、二つの問題をその底辺で結びつけているのは、「オオトリテエ」の問題であろう。庄兵衛は、喜助の一件を聞かされて、「これが果して弟殺しと云ふものだらうか」という懐疑を抱いた。苦から救うべく弟の命を絶ったことが罪という名にふさわしいものかどうか、庄兵衛は疑いを抱いた。思案の末に庄兵衛は「オオトリテエ」に従ふ以外に道はないことに気づいた。お奉行様の判断をそのまま自分の判断にすることによって、懐疑の世界をのがれようとした。しかし、同心羽田庄兵衛の心の隅に「どこやら腑に落ちぬもの」が残ったが、庄兵衛が進んでお奉行様に事の次弟を尋ねることはないままに終るであろう…これが「高瀬舟」の結末である。

「最後の一句」の十六歳の小娘いちは西町奉行佐佐又四郎成意に対して、父の命乞いの訴願をしたうえで、「お上の事には間違はございますまいから」という最後の詞の最後の一句を吐いた。「なんだかお奉行様に聞いて見たくてならな」い思いを感じつつも、庄兵衛はこの一件について奉行の判断を尋ねるという暴挙には出るはずもない。庄兵衛のその後の「沈黙」の心の奥底に、毫光のさす喜助の姿が焼きついている以上、庄兵衛は、「黒い水の面」をすべり行く高瀬舟に身を任せるはずである。欲望と懐疑に対して、「人はどこまで往つて踏み止まることが出来るものやら分らない」のが人の「性（さが）」である。「オオトリテエ」の与えた二百文の鳥目を懐にして、「此二百文を島でする為事の本手にしようと楽んでおります。」と語る喜助は、あの「カズイスチカ」における老翁の延長線上にある人物である。

鷗外は大正四年一月一日に発行された「心の花」に「歴史其儘と歴史離れ」を発表したが、その中で、「友人中には、他人は『情』を以て物を取り扱ふのに、わたくしは『智』を以て取り扱ふと云つた人もある。しかしこれはわたくしの作品全体に渡つた事で、歴史上人物を取り扱つた作品に限つてはゐない。わたくしの作品は概して dionysisch でなくつて、apollinisch なのだ。わたくしはまだ作品を dionysisch にしようと努力したことはない。[21]」と記して、抑制の効いた創作態度を自ら誇示しているが、このような鷗外の言挙げが「わたくしの作品全体」をカバーしうるものでないことも、また、自明のところである。ディオニュソス的深淵をのぞき見た鷗外の韜晦の言辞でもあり、自己検証の営為の片隅に一縷の望みが蟠踞していたとしても鷗外を責めることはできない。

「高瀬舟」の結末を、「次第に更けて行く朧夜に、沈黙の人二人を載せた高瀬舟は、黒い水の面をすべつて行つた。」という一文で締めくくった大正四年十二月五日の日曜日、鷗外の眼には石黒書簡は入っていなかった。鷗外は歳晩初冬の晴れた日曜日、「カズイスチカ」や「妄想」以来

のカレントの中で「高瀬舟」の世界を構築した。そして、翌六日陸軍省に出勤した鷗外のもとに届けられた石黒書簡ですべてを知った鷗外は一気呵成に「寒山拾得」を書き上げた。十二月七日のことである。

鷗外は、「縁起」において「いつもと違て、一冊の参考書をも見ずに書いたのである。」と記している。長谷川泉氏の指摘されるとおり、「異例のこと」であり、「異例の創作方法」[22]である。それは、「子供にした話」を、「殆其儘書いた」ためだけのものに止まらない、あるものの存在を感得せしめることばである。「子供にした話」でも、もう一度原拠を調べ細密なる事実に拠って作品化することは可能であり、鷗外らしからぬ性急にすぎる創作態度である。思うに、石黒書簡によって、「上院占席」という一縷の望みが、はかない一縷の望みにしかすぎなかったことを確認した鷗外が、この一件についての回答をなすべく筆を執ったのが歴史小説「寒山拾得」ではなかったか。あの「キタ・セクスアリス」を「昴」に発表したのと同じ日、鷗外は、「東亜之光」に「当流比較言語学」を載せ、その中で、Sich lächerlich machen なるドイツ語に触れ、「自分を可笑しくするといふ詞が日本には無い。人に笑はれるといふと、大相意味が軽くなってしまふ。世の物笑へになるなどといふ詞が古くは有った。これは稍々似てゐるやうだが、今はそんな詞も行はれてゐない。西洋人は自分を可笑しくすることをひどく嫌ふ。それだから其詞がある。日本人は自分を可笑しくするのが平気である。それだから其詞が無い。義憤なんぞが好い例である。義憤の当否は措いて、何に寄らず、けしからんけしからんを連発するのは、傍から見ると可笑しい。日本人がそれを構はずに遣るのは、自分を可笑しくすることを厭はないのである。Maupassant の訳書が発売禁止になるなんぞを見ると、政府も或は自分を可笑しくするのを厭はないのではあるまいか。」[23]と書いて、予測される「キタ・セクスアリス」発売禁止という事態への回答を行っている。十二月六日の石黒忠悳の書簡で、事態の内実を知った鷗外は、「一層言行ヲ慎ミ」と記した。明治十四年の陸軍入り以来、鷗外の過去を「知悉」する石黒書簡には、鷗外の言行についての苦言の一節があったはずである。そして、その後で鷗外は「寒山拾得」という作品を書いた。歴史小説「寒山拾得」と上院占席問題との関係は、かつての「当流比較言語学」と「キタ・セクスアリス」発禁問題との関係と軌を一にしている。

「いつもと違て、一冊の参考書をも見ずに」書いた鷗外は、「寒山拾得」で二つの誤りをおかした。その一つが閭丘胤の姓と名であり、後の一つが閭丘の官職名であった。性急に作品化を急いだ当然の帰結でもあった。蹲って火に当っている痩せてみすぼらしい小男を前に、恭々しく礼をして、「朝儀大夫、使持節、台州の主簿、上柱国、賜緋魚袋、閭丘胤と申すものでございます。」と名のる閭丘の愚かさは、明治十四年十二月の陸軍軍医副任官以来の三十四年の「フイリステル」の生活で鷗外が知りつくした愚かさであった。「縁起」の最後に「実はパパアも文殊なのだが、まだ誰も拝みに来ないのだよ。」と書いた時、鷗外は、「まだ」が「もう」であることを十分すぎるほど知っていたはずである。鷗外森林太郎が陸軍省医務局長の椅子を退いたのは大正五年四月十三日のこと、「近業解題」が書かれてから百二十六日後であった。

注（1）「鷗外全集」（昭和四十六年～五十年、岩波書店）㉟—六七八、以下同書による。
（2）㊱—三六六
（3）「鷗外全集」月報38
（4）七四頁
（5）「借行社にて衛生部将校に告ぐるの一節」（㉘—五〇）
（6）㊱—五三〇
（7）⑩—一一三
（8）正しくは「城狐社鼠」
（9）「東京経済大学会誌」39（昭和三十八年六月）一八〇頁

(10) 「畑塵」広告文（㊳—二四三）
(11) 国立公文書館蔵
(12) 石黒忠悳著「懐旧九十年」（岩波文庫）四〇七頁
(13) 「石黒忠悳と鷗外」「石黒忠悳から見た帰国前後の森林太郎」（「森鷗外の断層撮影像」至文堂）、「鷗外・森林太郎と況斎・石黒忠悳～日本近代医学史におけるふたりの出合い～」（山梨学院大学「一般教育論集」第六号）
(14) 「あきらめの哲学—森鷗外」（PHP研究所）二〇四頁
(15) 明治三十三年一月一日付
(16) 篠原義彦「森鷗外の世界」（桜楓社）
(17) ㊱—三四八
(18) ⑧—六
(19) ⑧—二〇〇
(20) ⑯—二二九
(21) ㉖—五〇九
(22) 「森鷗外論考」（明治書院）四一〇頁
(23) ㉖—三四一

（昭和五十九年九月十一日受理）
（昭和五十九年十一月七日発行）